エピローグ

照りつける夏の陽射しは、黒部・立山の山岳地帯を一気に濃い緑の地に変えた。炎暑の夏が北アルプスにもやってきた。一冬、観光客を拒否してきた秘境の地は、夏になるとやっと下界と同じような気温や、風景を人々に示す。

長い夏休みを利用して、伊狩冴子は生まれてはじめて、長野側の大町ルートから、黒部・立山の地に入った。

友人の富坂千香子、そして、日報新聞森中弘光も同行した。もっぱら森中は二人の女性のために運転手役をつとめた。

扇沢で車を捨て、関電トロリーバスに乗って五四〇〇メートル、所要時間十六分の距離である。やっと長旅の運転手役を解かれて、森中はトロリーバスの席にゆったりと坐った。

森中と仲条が追った首なし殺人事件は、すでに大方の取り調べがすみ、決着を迎えようとしていた。

三つの連続殺人事件の首魁（しゅかい）は室堂建設会長の長門蓮作で、殺しの実行部隊となったのは暴力団統正会の連中、事件の構造は極く単純な図式のものだった。

富山・東京の地で、殺人並びに死体損壊の行為をやり遂げた実行部隊の連中は

、台場地区の捕物劇で一網打尽になっていたから、取り調べも順調にすすんでいたのであった。
黒い司祭者？それを主宰したのは長門蓮作だったが、こちらの話ばかりは、蓮作の口も重く、複雑な過去の人間関係も絡んでいて、全容はまだ明らかにされていなかった。
トロリーバスが十分ほども走った頃、車内アナウンスがあり、困難を極めたトンネル工事での最難関の地、破砕帯を間もなく車は通過しますという知らせがあった。
「問題の破砕地帯ね。多くの犠牲者を出したという」
すぐ後ろの席に坐っていた冴子が、隣の席の千香子に言った。
破砕帯と記された白い標識灯がトロリーバスの車窓から望めた。
これまでの黒い儀式についての取り調べでは、昭和三十二年五月一日に発生した軟弱層崩落による大出水事故で、一挙に三十四名の工夫たちの命が奪われ、そのあと、工事の無事を祈願して、四人の人柱が立てられたということになっている。
森中は何度も富山支局にいたときに、立山黒部アルペンルートは踏破していたし、千香子も一度、招待したことがあるので、冴子だけがこのルート初見参となる。その分、道中、千香子は冴子のガイド役をつとめていた。

間もなく、トロリーバスは地下構内の黒部駅に到着した。
夏休みが始まったばかりの七月二十二日のことだったから、それほど人は溢れていなかったが、本格的な夏になると、トロリーバスに乗るのにも時間待ちの長い行列ができるほどの賑わいを見せる。
年間百万人と言われる観光客を黒部一帯の山岳地は呑み込むのであった。地下道から上へ目指して上り、外に出ると、いきなり黒部ダムの青い湖と、湖を取り囲むようにしてまわりにそびえ立つ急峻な山々が眼に飛び込んでくる。
「わあ、凄い！別天地に一気に連れて来られたようね」
と冴子が無邪気に声を上げた。
黒部ダムの大堰堤（だいせきてい）のそばに立ち、三人は放水口から吐き出される七、八十メートルはあろうかと思われる大瀑布に眼をやった。
「きれい！虹が立っているわ」
冴子は感激しているふうの声を出し、持参したカメラに七色の虹を映した大瀑布の様をおさめた。
が、森中と千香子は、この黒部湖畔に立ったとき、急に無口になった。
冴子はひとり、雄大なスケールのあたりの光景に気を奪われていたが、やがて、二人の態度に気付いた。
眼の前に展ける黒部湖の湖面は満々と水を湛え、夏の陽光を反射させて輝き渡っていたが、三人共、別の想いで美しい

湖を眺めることになった。
黒部湖の河床部のどこかに、四人の人柱の首がコンクリートで固められ、三十数年前、ひそかにおさめられたのだ。
この事実が本格的に明らかにされるのは、この夏の掻き入れどきの観光シーズンを了えた頃のことになる。
三人は無言のまま歩き、一旦、黒部駅の方角にもどったあと黒部ダム管理事務所の建屋の近くにある殉職者慰霊碑に立ち、複雑な胸中のまま、手を合わせ、犠牲者の冥福を祈った。『尊きみはしらに捧ぐ』と石碑には文字が刻まれている。
つるはしや鉄槌などの工具を手にした六名の工夫たちの彫刻像が立ち、一七一名という犠牲者の数もレリーフ板には記されていた。
観光コースは大観峰に登るロープウェイコース、さらに立山トンネルを経て室堂高原に至るコース もあったが、この日は、直接、千の平小屋の小矢部吾平を彼らは訪ねる手筈になっていた。
船着場のある湖畔に降り、遊歩道をめぐって三十分後には、彼らは千の平小屋に到着した。
千の平小屋には仲条立彦もすでにやって来ていた。
早目の夏休みをとった小矢部岳男も顔を見せており、後発組の三人を加え、千の平小屋には事件に巻き込まれた者たちが、主人の吾平を入れ、総員、顔を揃えた。

夕刻がそろそろ迫る時刻のことで、他に宿泊客もあり、吾平と岳男は夕食の支度などに追われていた。
客室に落ち着いたとき、仲条が後発組の三人に言った。
「小矢部さんは警察にこれまでの経緯は全部、話をしたようです。その話はわれわれにも今晩全部、明かしてくれるでしょう」
「赤根の刑事（でか）さん、今度の事件では片腕の力を削がれていたお蔭で、大いに点数を稼いだんだろうな」
「ほんとうは今夜の懇親会にも顔を出したいんだが、魔物の研究で忙しくて失礼するので皆さんによろしくと言ってました」
「赤根刑事もまた魔物の研究中か、主役が欠けるが、魔物の研究ではこっちだって負けちゃいないぞ。冴子さんはその道の権威だ。よかったら警察の力になりましょうかと言い返してやればよかった」
仲条と森中が笑みを口元に浮かべながら言い合った。
千香子と冴子は、窓を明け、黒部湖の方角を見やっている。ブナ林の若やいだ緑が、落日の間の陽光にいっとき、柔らかな樹葉を垣間見せてくれた。
吾平の秘められた過去については、すでに明らかにされていた。
昭和三十二年五月一日の大破砕帯遭遇による出水事故で三十四名の尊い人命が失われたあと、工事責任者の一部の者、

室堂建設の長門蓮作らが、怒れる山の神を鎮めるために、黒部の湖底予定地（当時はまだ掘削作業は本格的にはすすんでいない）に、四人の人柱を捧げることを誓い、四人の者の首を狩り、神前に捧げた。

昭和三十二年十二月、七ヵ月の苦闘の末、掘削部隊は大破砕帯を突破、そして翌三十三年二月二十五日には関電トンネルは全面開通、工作機械、物資などの輸送が可能になり、ダム基礎河床部の本格的な掘削作業も開始された。

黒い司祭者たちは、元修験僧の岩垂六助から立山の守護神、雷神の嗔（いか）りを鎮護する法を授けられ、その秘儀にのっとって、三十数年前に四人の供儀者の首を狩ったのであった。

小矢部吾平は、同じ工夫として働いていた庄川征雄と一緒に掘削工事に従事していた。昭和三十二年五月六日、小矢部、庄川は関電道路を切り開く作業についていた。吾平は発破作業班の責任者で鳴沢岳での発破作業で、長門蓮作の命により、そそり立つ岩肌の洞窟内に数名の作業員がいたにもかかわらず、爆破装置のスイッチを押した。

このとき、庄川は洞窟内にいた一人だった。一瞬のうちに阿鼻叫喚の生き地獄がつくられた。

吾平の記憶では、七名の作業員が洞窟内にいたが、生存者は庄川ら二人だけだった。そして、二十キロのダイナマイト

仕掛けによって吹き飛ばされた犠牲者たちのうち、四人の者の血みどろの首が、長門蓮作らによりひそかに、遭難現場から持ち去られた。

ほんとうなら、庄川征雄の五体も吹き千切れて飛んでいるところだった。

偶然の幸運に恵まれ、庄川征雄は九死に一生を得た。発破作業班に参加して、目撃者となつた小矢部吾平と、ただ一人の生存者庄川征雄は口外することを禁じられ、長門蓮作から「口封じのためお前たちも殺したっていいのだぞ」と脅しを掛けられた。

洞窟内作業班の責任者であった庄川征雄は、同僚たちを失ったことにショックを受けると同時に、責任を感じ、生涯、同僚たちが殉じた立山の山々を見守り、暮らすことを決意した。

立山の峰の一つ一つに、庄川征雄は、神になった仲間たちの気高い姿を見ようとしたのであった。

山岳写真の一枚一枚には、庄川征雄の鎮魂の思いが込められていたのだ。

が三十数年が経ち、長門蓮作はまた、黒い司祭者の役目を引き受けた。

室堂建設が、ＰＲ雑誌に使う立山連峰の山々の写真の撮影を庄川征雄に依頼したあと、雪山に、暴力団統正会の連中を殺し屋として派遣した。

殺害後、雪洞で死体を保管したのち、人目にさらすかたちで、五月五日早朝、玉殿の岩屋に首だけ切断された庄川征雄

の遺体が放棄された。
黒い雷鳥の魔符と一緒に…。
長門蓮作は、人身事故続きの近頃の自社の建設工事のお祓いをする目的で、また、黒い秘儀の主宰者となろうとした。
三十数年前の人柱殺人が、また、この世に甦ったのであった。
千の平小屋に全員が顔を揃えたのは午後九時をはるかに過ぎた時刻のことだった。小矢部吾平、岳男。森中弘光、宮坂千香子、伊狩冴子。そして仲条立彦の六人のメンバーであった。初めに小矢部吾平の話を聞くことにした。
「ともかく、わたしと庄川征雄は自分たちの生命と代償に秘密を守ることの他に、重大な誓いを立てさせられたのです。いつか、再び人柱が必要になったときはお前たちのいのちを貰い受けることになるやも知れぬ。それは百年のあとのことでも、神に誓ったことだから必ずこの世に復活することだろうと長門蓮作がわたしと庄川征雄に申し渡したのです」
吾平は当時のことを思い出すかのように眼を宙空に向けた。
「例の岩垂六助さんの遺した『千の平雑感』の紛失ノートの行方と、何が書かれていたかということ、それから、三十数年前の人柱を立てたときに、岩垂六助さんがどのような役目を果していたのか、ぼくのいちばん知りたいことです」
仲条が急き込んで訊いた。
「話は順序を追ってのことでなくちゃ、

わからなくなるぞ。まず小矢部吾平さんの話をじっくり聞くのが筋だぞ」
と森中が司会役を引き受け、仲条をたしなめた。
「いえ、百年後に再び、どうのこうのと言う話は元はと言えば、岩垂六助が口にしたことなのです。山岳仏教・密教道の僧であった岩垂六助は一部 ノートにも書き残していますが、黒部開発に対して、神の聖域を侵す行為と終始反対の立場をとっていました。が、あの破砕帯の大事故の遭難後は、神の怒りを鎮める密法の実践に身を捧げる決心をしたようです。黒い四羽の雷鳥は、密法によると、立山の神の使徒、そして、立山を鎮護するのは風魔雷神さま、密儀の事細かな部分は知りませんが、三十数年前、人柱が捧げられたとき、その首に、黒い雷鳥の魔符が貼られていたのは事実です」
吾平は三十数年前の怖ろしい一場面を、いまも見据えている眼になった。
一呼吸おいてから、話を続ける。
「岩垂六助は結果的には神の嗔（いか）りを鎮めました。しかし、人柱を出したことで、長門一族に対し、工事完成後は、それを主宰した者もまた、おのれの血で償（あがな）うよう求めました。さもなくば死後、立山地獄に堕ちるであろうと。その誓約を密儀の世界で、長門蓮作は負わされていたのですが、黒四ダム完成後、長門蓮作は、岩垂六助に対し一顧（いっこ）だにしなくなりました。それ

どころか、その後は政治家にもとり入り、室堂建設を大会社にと発展させることだけに腐心してきました」
「それで、今度、殺人事件に巻き込まれた者たちは？」
仲条が現実の事件に話の矛先（ほこさき）を向けさせた。
「長門蓮作も八十近い齢（よわい）、自分の余生の少ないことを知って、三十数年前の秘儀の約束事をやっと思い出したのでしょう。立山地獄に堕ちたくないために。長門蓮作はおのれの血で購わずに、初めに、関係者の一人、庄川征雄を殺害し、次に元愛人の野々村芳子の娘、比呂あすかこと、野々村久美を手に掛け、あろうことか、次には、作之介の孫の雅樹を、下手な誘拐劇を、次男の啓作と組んだ上、犠牲者の一人としました」
「そして次に狙われていたのが、小矢部吾平さんだった」
司会役の森中が次を継いだ。
「山崎誠一郎が比呂あすかを認知した父親だったのは？」
「長門一族は乱れていましたから。ほんとうの父親は蓮作なのか、作之介か、啓作なのか、わたしにもわかりません」
と吾平は仲条の問いに答えた。
「秘儀のことですけど、紛失したノートにそのことは記載されている可能性がありますが、ノンブル『三』のノートはどこに？」

冴子がいちばんの関心事を口にした。
「わたしの推測では、たぶん、風魔雷神さまを祀った雄山神社奥の岩室の中に隠されているのではと」
「風魔雷神さまの岩室？」
「ええ、秘儀を行うとき、庄川征雄と共に岩室に連れて行かれたことがあるのです。雷神の蛇龍の像と、それを守護する黒い雷鳥が四羽、岩壁に彫り込まれていて」
「四羽の黒い雷鳥？」
と驚きの声を上げたのは仲条だった。
「ローソクの灯りでと言う条件つきならわたしが、一度、ご案内します。場所はうろおぼえですが、何とか見つけ出せるのではないかと思います」
その吾平の申し出に、冴子は頷きを返したが、興奮のためか、冴子の顔は少し蒼ざめていた。
「一つだけこの場を借りてわたしからお願いしたいことがあるんですよ」
「何でもおっしゃって下さい。われわれは小矢部さんに協力しますよ」
「いや、極く個人的なことなんです。息子に言いたいことがあって」
みんなを代表し受け答えした森中を、吾平は軽く制した。その父親の意をくんだのか、次に、岳男が発言した。
「お父さん、いま決心がついたことがあるので、聞いてくれますか。お父さん、ぼくは毎年、四月二十一日の夜になると、黒部湖の闇に四つの青い鬼火が舞う夢を見てきた。その日が、岩垂六助さんが入水自殺した日と手紙で知らされて、こ

こ、二、三日自分なりに色々と考えてみたんです。庄川征雄さんもお父さんも、黒部湖や立山の山々を愛し守ることで、人柱になった人や、殉職者の霊を慰めてきた。それなのに、千の平小屋に後継ぎがいないというのはやはり問題ですよね。ぼくは、この自然に恵まれた地で、黒部の秘境を守って行く決心はもう、ついているんです」

岳男がきっぱりとした口調で言った。彼とて大学時代は山岳部に身を置いていた山男である。

眉を立て、眼をしっかりと見開いた岳男は、面構えも、背恰好も父親の吾平によく似ていた。

「いいな、二代目か」

と森中が言い、他の者も口を揃えて岳男の決意をほめ讃（たた）えた。

「ただし、一年に一度、そうだな、この夏休みの始まったばかりの日がいい、七月二十二日の夜、ここに集まったメンバーは全員千の平小屋に集合というのはどうですか」

岳男が声をはずませ言った。

「孫子代々までか。吾平さんの創作話、黒部人柱伝説も語り継がれて行くといいな」最後は森中が締めた。

明るい声の中、みんなは夜の更けるまで、この黒部湖畔の山小屋で酒を汲み交わし、談笑の時を過ごした。

《了》